随筆

『手書きの参宮記集』顛末記

飯　田　良　樹（久居一志地区）

十二年前に直腸癌の手術を受け、その後肺転移が見つかりラジオ波で焼いて頂きました。

療養中、時間に余裕が出来ました。そこで、以前から八太村の長老より「飯田家の歴史を調べて欲しい」と言われていましたので、先祖が営んでいた旅籠「朝日屋藤助」を調べることにしました。残念なことに、いろいろな経緯があり旅籠の資料は散逸していて自宅には残っていませんでした。そこで図書館・博物館や古書店を巡り、先祖が営んでいた旅籠「朝日屋藤助」が記載されている資料を収集しました。

収集した資料の道中記（日記・定宿帳・案内記）のなかで、道中日記はほとんどが金銭帳や名所案内ですが、挿絵や名所絵がかかれた珍しい三冊がありました。

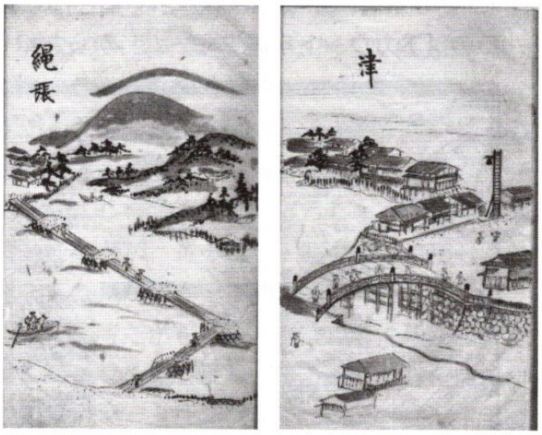
俳句と挿絵を中心に描かれている道中日記（図１）は、彦根近郊より童と旅立ち、鈴鹿峠から関に、関から一身田専修寺に参り、宮川を渡って神宮に参拝した後、朝熊・二見で文章は終わっています。その間の土地の風習や風景を説明と俳句・挿絵で書いています。挿絵は専門家が描いたようなので、調べると彦根藩士に絵を教えていた吉田雪齊であると彦根城博物館 高木文恵さんや湖北画人愛好会グループの大谷 隆氏より情報が得られましたが、題簽がないため各々を「天保十一年　伊勢参宮参り」「安政四年　骨納め旅日記」「安政四年　竹生嶌参詣」と名付けました。作者の茂竹庵笹雄については情報が得られませんでした。

また、『参宮道名所圖絵』（図２）は暗峠の絵から始まり、奈良から初瀬街道を通り伊勢参宮、帰路は「天保十一年　伊勢参宮参り」の往路とは反対に参宮街道・東海道を描き伏見で終わっています。

江戸時代に版本としていろいろ出された名所圖絵にはない図絵でしたので、以前コピー機でコピーして本を製作、郷土史を研究しておられる方々にお配りしたところ好評でした。そこで図書館に寄贈して多くの方に見ていただこうと思ったらコピー本は収蔵出来ないといわれていたので、ちゃんとした製本で世に出したいという思いが以前からありました。

絵図の「縄張」は「名張」のことで、昔の道中記は旅人の筆者がその土地で聞いた音のままに書いたのでこうなりました。以前「高部」と書かれた地名が分からなかったとき、妻が「こうべ」と読んだので、なんだ「神戸」かと、気づいたことがありました。このように、道中記の地名には泣かされます。

（図１）



（図２）

（図３）

もう一つは『伊勢大和紀伊巡圖』（図３）で、文化八年の道中日記です。舩で和歌山に着き、根来寺・高野山・法隆寺・奈良から伊勢を描いた絵図のみの日記です。大空より見下ろす鳥の気分にさせられる鳥瞰図風に描いた絵で、奈良から伊勢までが書かれていませんが、これも珍しい道中日記と思っていました。

この度、世の中がコロナ騒動で大変となり、診療所や印刷業界の仕事の量が減ってくる事態で、印刷業界の知人より何か仕事がないかと話がありました。私も時間の余裕があり、これは良い機会とあたためていた挿絵や名所絵がかかれた三冊を『手書きの参宮記集』と題して製作することにしました。

写真撮影はデジタルアーカイブを手掛けているミカミプロセスの石川昌弘さんが、翻刻は三月に三重県史編纂事業が終了して時間ができた牛田孝子さんと同朋大学仏教文化研究所の千枝大志先生が引き受けていただき、印刷と製本を北浜印刷工業の山中 武さんが手掛けて頂きました。校正、印刷、製本と進み、約三ヶ月で完成いたしました。発行日はある事情で予定より２週間遅れましたが、私の誕生日の５月25日といたしました。

また、今までの出版は無線綴じでしたが、この際念願であった糸綴じ厚紙表紙のカラーにしました。

この本が、後世の道中資料になったら嬉しいなと思っています。

県医師会・久居一志地区医師会図書館、県立図書館や各地の図書館に納本させていただきましたが、少しなら残部がありますので興味のある方はご連絡下さい。

（表紙と裏表紙）

陳謝

『三重医報』第713号「鼻くそ丸めて萬金丹」で現在発売されているのは「伊勢の国萬金丹」のみと記載したことです。校正の時に気付くべきでした。『雲出川』には「小西萬金丹」も記載していました。手違いで「小西萬金丹」の文字が抜けてしまい、失礼この上ないことをしたことを恐縮しております。誌面をお借りしてお詫び申し上げます。

「**小西萬金丹**」は今も「**小西萬金丹本舗**」より健康維持食品として販売されております。